

応仁文明の乱からの大徳寺と妙心寺の復興

千田 たくま

はじめに

応仁元年(一四六七)、京都で細川勝元(一四三〇～一四七三)と山名宗全(一四〇四～一四七三)を中心として抗争が勃発する。これにより文化・政治の中心地であった京都は、雑兵足軽による強奪や放火にみまわれた。応仁文明の乱(一四六七～一四七七)である。

京都の大半が戦火を蒙り、政治や儀式は途絶え、公家などは地方へと避難した。だが、これによって京都と地方との交流が生まれ、新たな文化が開くことともなった。また統治制度が崩壊して、実力による押領、下克上が頻発し、群雄割拠の戦国時代へと進んでいく。中世の終焉であり、近世の始動である。

さて応仁文明の乱は、文明五年(一四七三)三月に山名宗全、五月に細川勝元と首謀者が相次いで亡くなることで、収束へと向きを変え始める。翌文明六年(一四七四)、細川政元(一四六六～一五〇七)と山名政豊(一四四一～一四九九)との間で、いちおうの和睦が成立する。ただその後も、幾度かの競り合い

局地的戦闘がつづき、最終的には文明九年(一四七七)に終息をみて、「天下静謐」が唱えられた。

戦乱によって京都はほぼ焼失し、多くの寺院も兵火をこうむり、什物の疎開と僧侶の避難を余儀なくされた。臨済宗においては、たとえば九月一日の東岩倉の戦いで南禅寺が焼亡し、一〇月三日の相国寺の戦いで相国寺が焼亡している¹⁾。

本稿で論ずる臨済宗大応派下大灯派の寺院も同じく焼亡した。たとえばそれを大徳寺にいた一休(一二九四―一四八二)の足取りから見ると、応仁元年(一四六七)八月に大徳寺の瞎驢庵から京都東山の虎丘庵に移り、九月にはさらに山城の酬恩庵(京田辺市)に移っている²⁾。すなわち大徳寺は、五月二六日の上京の戦いや、船岡山の戦いで焼失し、一休らは避難を余儀なくされている。

乱後の臨済宗寺院の復興には、寺院によって差があった。五山においては、相国寺がもと足利義満(一三五八―一四〇八)の建立で、なおかつ僧録を司るところから、乱後に足利幕府の援助を受けて復興を開始し、文明一六年(一四八四)には方丈と本坊、翌年には東大門、翌々年には庫裡と、次々に伽藍を完成させている。一方、南禅寺は江戸時代に金地院の崇伝(一五六九―一六三三)が僧録になり、徳川幕府の支援を受けるまで復興が進まなかった³⁾。つまり五山は、幕府(武家)を支援者としていたので、紫衣地よりも実権を握っていた僧録寺院の復興が重要視された。

では林下である大灯派は、どのようにして寺院の復興を進めたのであろうか。これが本稿の問題意識である。当時、大灯派は派祖宗峰妙超(一二八二―一三三七)が開創した大徳寺を本寺とし、関山派と徹翁派(靈山派)が運営していた。

関山派は宗峰の弟子関山慧玄(一二七七―一三六〇)を祖として、正法山妙心寺を祖庭とする。徹翁派はやはり宗峰の弟子である徹翁義亨(一二九五―一三六九)を祖として、靈山徳禅寺を祖庭とする。焼失

した大徳寺はこの関山派と徹翁派の両派によって復興が進められる。本稿ではその復興過程をたどることを第一の目的とする。

ただし大徳寺復興途中である永正六年(一五〇九)に、大灯派は関山派と徹翁派に分裂し、関山派は妙心寺を紫衣地とするようになり、以降、大徳寺は徹翁派が単独運営することになった。

そこで本稿では、応仁文明の乱が収束に向かい、大徳寺が復興を始める文明五年(一四七三)から、大灯派が分裂する永正六年(一五〇九)までの三六年間に焦点を当て、大灯派による大徳寺の復興過程を追跡するのに加えて、関山派による妙心寺の復興過程をも調査する。これによって次の二つの疑問を考える。

一、大灯派はどのような方法で大徳寺を復興させたか。

二、分裂する以前の関山派と徹翁派の関係はどのようなようであったか。

論述展開は、状況変化の指標となる綸旨下賜を区切りとして、各綸旨下賜前後に僧侶や門流が、どのような活動をして復興させていったかを追跡していく。では大徳寺の復興を、年を追って見ていこう。

一 文明五年(一四七三) 大徳寺復興の綸旨

文明五年(一四七三)に応仁の乱の首謀者山名宗全と細川勝元が亡くなると、その年の六月一九日に、後土御門より大徳寺に綸旨が下賜され、大徳寺は早くも復興へと動き始める。

大徳禅寺者、宗派無尽而祖風相承也。爰混兵戈之塵裏、改梵宇之古跡。宜遂不日經營之造功、奉祈有道太平之聖運者。綸命如此、仍執達如件。

文明五年六月十九日 左少弁

当寺衆僧中⁽⁴⁾

しかしすぐに伽藍の復興が始まったわけではない。「八月、行在所に叢院を靱め、大徳と曰う。開山、靈山、如意の遺像を敷里に迎えて、以て安奉す」⁽⁵⁾とあるように、まず八月に「行在所」に仮設の大徳寺が設置された。そしてその仮の大徳寺に、大灯派の禪師を紫衣入院させ「前住職」を付与することで、紫衣持から「官銭」を受け取った。復興のための資金調達である⁽⁶⁾。

この手法は、大灯派ではすでに享徳二年(一四五三)八月二日に、大徳寺が炎上したとき、その再興資金調達として実施されている。そのさいには義天玄詔(一三九三〜一四六二)に綸旨が下され、義天は紫衣を着して大徳寺に三日住山している。今回も同じ方法で復興資金を調達しようとした。ちなみに竹貫元勝氏の研究によると、永正三年(二五〇六)七月の壁書および大永二年(二五二二)十一月一日付けの規式では、大徳寺の入院が五〇貫、居成が一五〇貫とされている⁽⁷⁾。

文明五年(一四七三)六月の綸旨発給以後、最初に大徳寺住持となったのは、春浦宗熙(?〜一四九六)である。春浦は文明五年(一四七三)一〇月九日に再住入院した。春浦は応仁の乱前の、寛正二年(二四六二)十一月一日から寛正三年(二四六三)七月一六日まで、奉勅で初住しているので、今回は再住であった⁽⁸⁾。

そもそも春浦は大徳寺に縁の深い播磨赤松氏の出身で、養叟宗頤(二三七九〜一四五八)に嗣法し、多くの信者を得た人物である。たとえば竺英聖瑞は、足利義満の弟満詮(二三六四〜一四一八)の娘であり、比丘尼御所(尼五山)の通玄寺曇華院の住持となった。彼女は母のために創建された妙雲尼院を、春浦に

寄進し養徳院となしている⁹⁾。

また芳苑惠春(？〜一四九〇)は、後土御門の姉であり、比丘尼御所である安禅寺の住持となった。彼女は後土御門に奏上して、春浦に正統太宗の生前禅師号を下賜させている¹⁰⁾。このように春浦は当時の徹翁派の長老であり、大徳寺復興の最初の住持として適任であった。

春浦の次に住持となったのは、雪江宗深(一四〇八〜一四八六)である。雪江は文明五年(一四七三)二月二日に再住入寺した。雪江も応仁の乱前、寛正三年(一四六二)八月二日に奉勅初住しており、今回は春浦と同じく再住である¹¹⁾。雪江は義天玄詔に嗣法し、細川氏の庇護が厚い龍安寺などに住した、当時の関山派の長老である。

繪旨が出された文明五年(一四七三)の時点で、大徳寺の前住位であったのは、春浦と雪江の二人しかいなかった。それゆえに大徳寺復興にあたって、彼ら二人を勸請して再住させた。ただしこの時には、先に述べたとおり大徳寺は仮設であったので、入寺儀式を行ったわけではなく、入寺法語も残されていない。

二 文明七年(一四七五) 大徳寺補任の繪旨

雪江入寺以後の大徳寺歴代を、『大徳寺世譜』によって見てみると、四二世体調、四三世顕室、四四世柔仲宗隆、四五世岐庵宗揚、四六世景川宗隆と歴住している¹²⁾。このうち体調と顕室については、詳しい経歴はわからない。柔仲は一休と関係があり広徳寺に住するなどしたようだが、詳細はわからない。岐庵について『岐庵揚和尚語録』に「龍峰(＝龍宝山大徳寺)は旧基を再開し、而して老兄を以って上首と為す」とあり¹³⁾、岐庵の代から紫野での大徳寺の再建が始まっている。

紫野に大徳寺が再建され始める確かな年月は、岐庵の入寺時期がわからないので、明確にはしがたい。だが、岐庵の次の住持である景川が文明七年(一四七五)三月に入寺しているのも、それ以前であることは確かである。つまり大徳寺は、文明五年(一四七三)六月に後土御門の綸旨が発給されて一年半ほどで復興資金のめどがたち、紫野に大徳寺の造営がはじまった。

次の景川(一四二六―一五〇〇)は、今言ったように文明七年(一四七五)三月二〇日に入院した。入院に際して勅使が大徳寺に参向しており、『長興宿禰卿記』に

大徳寺入院(龍安寺弟子、為入院云々)、勅使蔵人右中弁政頭参向之由、出立料、自寺家致沙汰云々¹⁴⁾

と、勸修寺政頭が参向するとある。また『親長卿記』文明七年三月二〇日にも、

三月二十日 適属晴、今日紫野大徳寺、新命入院、右中弁政頭参向、用手輿、為洛中事、車之儀、当时不叶者¹⁵⁾。

と、政頭が参向するとある。そして『景川語録』の住京兆龍宝山大徳禅寺語にも、勅使香の偈があつて「勅使右尚書」と出ている¹⁶⁾。よつて景川の入院は、乱後初の伝奏の勸修寺政頭が勅使として参向して入院であった。以上の状況をまとめると、岐庵の代に大徳寺の再建が始まる。景川の代にはまだ伽藍は完成してはいないものの、入寺式を行える状況はととのい、儀式の執行が可能になった、ということだ。

景川の勅許入院ののち、文明七年(一四七五)七月二〇日に、後土御門から新たな綸旨が下される。

当寺住持職新補事、非前住之拳達者、不可有卒爾之勅請、向後弥為重宗派。被仰定之旨、可令存知給。者依天氣、執達如件。

文明七年七月廿日 右中弁

大徳寺住持¹⁷⁾

これは新たに大徳寺の住持職を補任する場合、前住衆の吹嘘状(推拳状)がないかぎり論旨を出さないという確認である。

大徳寺の住持になる場合、大徳寺で衆評を行い決議を取り、前住衆が連判した吹嘘状を作り、それを伝奏の勸修寺に伝達して執奏し、天皇が観覧して決済すると、紫衣勅使による入院が行われた。

たとえば、泰叟宗愈は文明九年(一四七七)に入院しているが、その際には、前住の雪江が「衆評の請状ならびに前住連署」を執奏して、住持に補任されている¹⁸⁾。また天縦宗受(?~一五一二)は長享三年(延徳元年・一四八九)に入院したが、その天縦に対して同年六月九日に出された論旨の草案を見ると、宛先「天縦上人禪室」の下に「表書名字也。勸修寺大納言、以使伝仰□。前住拳状在之」とあり、前住衆の吹嘘状の提出が求められ、勸修寺が伝奏となっている¹⁹⁾。

最後にもう一例をあげると、時代は下るが寛永五年(一六二八)に、紫衣事件で沢庵(一五七三~一六四六)が幕府に提出しようとした抗弁書案に、大徳寺においては、大衆による衆評をへて、前住衆の連判を取り付け、吹嘘状を提出し、伝奉より天皇に知らせて始めて入院となる、と記される。

殊自平僧住持長老の位に上申候事、入院開堂之義式不私候。其人之修行相翳、出世時至候へハ、徒為

其門中相勤、申一山之評定両度候、第三度にハ、於方丈一山之大衆相集、一列同心之上、即於開山国師之前、吹拳状を相調、諸長老連判之任、当寺自昔之伝奏観修寺殿を以て、禁中へ令言上之時、叡覧有之、其日に住持入院之儀被仰出、勅使其御沙汰候、是ハ依文明七年之繪旨、如此相定法にて申候。²³⁾

以上のように、大徳寺に紫衣入院するには、大衆の決議と前住衆の許可が必要であるということであり、それが文明七年(一四七五)に再確認された。

大徳寺歴代に話しを戻そう。『大徳寺世譜』によると、景川の次の四七世住持は一休となつて²⁴⁾いる。だが一休の大徳寺住持時期については問題がある。先述したように四六世景川は文明七年(一四七五)三月に勅許入院しているので、四七世の一休の入院は文明七年(一四七六)以後になるはずだが、甘露寺親長の『親長卿記』文明六年二月一五日と一六日の条に、

十五日、陰、大徳寺住持職事、順藏主一休、奏聞、勅許。

十六日、晴、早旦退出、大徳寺繪旨令書、元長遣寺家了、午剋帰家。²⁵⁾

とあり、文明六年(一四七四)二月一五日、後土御門が一休を大徳寺住持に勅許し、一六日付けで後土御門の繪旨が大徳寺に出され、親長の息子元長が大徳寺に使わされている。それに応じて大徳寺は二二日に、前住の柔中が繪旨を持って一休に住持要請に行く。

広徳柔中隆和尚、捧勅黄来、致大徳住持之請、不可辞也、師作二偈、且謝且警(後略)。²³⁾

一休は辞退できずに二偈を作った、となっている。これにより一休は文明六年(一四七四)に大徳寺住持となつたとされる。ただしこの状況説明には、四つの矛盾がある。まず前堂ではない蔵主に住持職の勅許が下されている。伝奏が大徳寺伝奏の勸修寺ではなく甘露寺である。「二偈」を作ったとあるのみで、住持したとはいわない。そして歴代住持の世代と合致しない、の四つである。

はたして一休はいつ大徳寺住持となつたのか、そして初住か再住かなど検討の余地は多い。本稿ではこの問題は措き、ともかく一休は、大徳寺の復興に貢献し、資金や土地の寄進を頻繁に行つたことを認識しておくにとどめる。

さて、大徳寺は順調に再建される。文明一〇年(一四七八)には方丈が上棟され、翌文明十一年(一四七九)には法堂が上棟する。方丈造営と法堂上棟のさいの住持が特芳禅傑で、それゆえに特芳が「再興の始め」といわれる²⁴⁾。

文明一〇年(一四七八)十一月二日には、幕府が山城国内の領地を返付し²⁵⁾、文明十三年(一四八二)には正門と偏門が落慶している²⁶⁾。文明一八年(一四八六)には、関山派の西浦宗肅が奏上して、後土御門より開山塔の額「靈光」を賜った²⁷⁾。

さらに大徳寺は再建復興を進めていく。延徳三年(一四九二)には真珠庵が創建されるなど、塔頭の建立と所領の寄進が進み、幕府により敷地や田地の安堵がなされる。また明応二年(一四九三)には、支証を書き上げた「日記」が制作されている²⁸⁾。

以上のごとく、大徳寺の再興には関山派と徹翁派の両派が尽力してきた。文明十三年(一四八二)一月一九日の一休入祖堂の入牌料納下帳を見ても、大徳寺の東堂として「妙心寺、徳禅寺、龍安寺」と記されている²⁹⁾。周知のように東堂とは自派の前住を指しているので、この当時、関山派と徹翁派の両派が大

灯派一門であると認識されていた。

大徳寺の壁書においても、評定衆として妙心寺や龍安寺の住持が連署しており³¹⁾、実際に運営に加わっていた。さらに関山派の雪江が、徹翁派の泰叟の大徳寺入院を執奏するなどしており、関山派と徹翁派は大燈一門として協同していた³²⁾。

また大徳寺の復興には、年代は明確ではないが「大徳寺再興奉加錢納下帳」に「靈山派九十五貫九百二十四文。関山派四十一貫七百文」³³⁾とあり、靈山派(徹翁派)と関山派が多く奉加錢を納めている。またこの納下帳には、堺の豪商尾和宗臨(？～一五〇一)があわせて五百貫文を出したとあり、さらに「尾和宗臨寄進状」の包み紙にも「応仁鬱収之時、復興大徳・徳禪・如意・大用、大担越也」³⁴⁾とあり、復興にはこのような檀越の寄進が大きかった。

大徳寺の復興に大きく関わった春浦、雪江、一休の三門派は、のちにそれぞれ春浦の弟子は大徳寺で龍泉派・北派・南派を、一休の弟子は真珠派を、雪江の弟子は妙心寺で四派を形成して発展していき、近世の大燈派門派の礎になる。では次に関山派の京都の由緒寺院である妙心寺の再興について見てみよう。

三 文明九年(一四七七) 妙心寺再興の綸旨

そもそも妙心寺と大徳寺とは寺格が異なる。妙心寺は応仁文明の乱で焼失したといっても、もとからほとんど伽藍がなかった。大徳寺は五山に列した祈願所で、法堂を備えた大燈派の紫衣地である。対して妙心寺は、関山派にとっては由緒寺院であるが、あくまで大燈派下の一末寺・平僧地であり、仏殿や法堂はなく、元離宮の玉鳳院と、日峰宗舜(一三六八～一四四八)が開山塔(微笑塔)に建てた微笑庵がある程

度であった。しかも妙心寺は寺領と建物を没収されており、再興には多くの問題があった⁸⁴。そのようななかで妙心寺の再興を任されたのが、大徳寺に勅請入院した雪江である。雪江は文明八年(一四七六)より、弟子の宗円を納所として妙心寺の日単・巻帳(米銭納下帳)を始めている。そして文明九年(一四七七)閏正月二六日に後土御門より「再興」の綸旨が下賜される。

妙心寺者、花園法皇革離宮、被為禪刹之名藍也。其基本寔以不淺、雖然罹度々禍乱、令没倒之趣、達天聽訖。早運謀計、宜令再興。者綸命如此、仍執達如是。

文明九年後正月廿六日 左中弁兼顯

雪江上人禪室⁸⁵

綸旨に「花園法皇革離宮」とあるように、妙心寺は花園法皇を開基とし、持明院統を檀越とする。しかし当時の朝廷はかなりの困窮状態で、有力な檀越とはいえなかった。

綸旨の伝奏は、大徳寺伝奏である勤修寺家ではなく、ちょうどこの綸旨が下賜された月の五日に武家伝奏に任じられた広橋兼顯(一四四九～一四七八)がつとめている。臨濟宗においては、紫衣地(南禪寺・大徳寺)は勤修寺家が伝奏をつとめることが多く、それ以外の香衣地黄衣地は、武家の寺として、その時の武家伝奏が適宜つとめた。

妙心寺は紫衣地でも黄衣地でもなかったが、当時、管領細川氏が檀那であったので、武家伝奏となった兼顯が伝奏をつとめた。ただ兼顯と関山派との関係は、後述するようにすでに文明二年(一四七〇)に関山派の瑞龍寺が十刹に準ぜられたとき、兼顯が伝奏をつとめており、この時から関係があった。しかも

『兼顕卿記』を見ると雪江と兼顕とは、兼顕が急死する文明一〇年(一四七八)まで交流している。

さて雪江は妙心寺の再興に着手する。まず方丈の造営を進め、文明九年(一四七七)五月一二日に方丈が上棟される。

大日本国山城州平安城西正法山妙心禅寺方丈立柱上棟

文明九年丁酉五月十二日也

住持比丘宗深誌之

大檀越花園院也 当今特賜諭旨再住興之

大工藤原次宗

棟梁藤原宗弘³⁸⁾

雪江は妙心寺復興に着手した人物であり「妙心寺中興」と仰がれている。しかし実際の雪江による復興の成果は、方丈の建造と、出納管理や住持任期の取り決めが主たる成果で、その他には「正法山妙心禅寺記」を著し、関山の伝記を撰述し、頂相の制作を要請するなど、執筆活動につとめたことがあげられる。

雪江による再興が、執筆活動に向かったのには原因がある。雪江は文明九年(一四七七)に再興に着手するが、二年後の文明一一年(一四七九)に中風になり半身不随になる。それ以降、雪江は妙心寺に庵居して療養生活を送り、対外活動があまりできなくなった。それゆえに室内で行える執筆活動に向かった。雪江には後世のために残した「遺誠」があり、そこに、

当寺住持職事、承統開山和尚命脈称宗匠者、限三十六ヶ月輪次、合致焼香者也。接待四来衲子之外、互以修造為念。珍重。

(文明七年) 季春六日 (妙心住持) 宗深

諸位堂頭(謂老漢之嗣法輩也)⁸⁷⁾

と、関山派の和尚は協力して一住三年を上限として輪番住持を行うとともに、「互いに修造を以つて念と為せ」とある。このように妙心寺は雪江により方丈が造営されたものの、それ以上の伽藍整備は進まず、妙心寺の発展は後世に託される。

四 文明年間後半の関山派

一般的に、雪江以降、妙心寺は雪江の弟子四人、景川宗隆、悟溪宗頓、特芳禪傑、東陽英朝の各門派による輪番によって護持していく体制が整ったと言われるが、そのような四派体制の確立はもう少し時代が下ってからであり、一五世紀末においては様相が異なる。

この時代、関山派では尾張犬山の瑞泉寺が、出世寺院と意識されていた。そして雪江門下の四派は、瑞泉寺とは別に門派の中心となる寺院を持っていた。

一番弟子の景川(一四二六―一五〇〇)は、すでに大徳寺の項で見たように、大徳寺に勅許入院した人物である。景川は文明一三年(一四八二)に雪江より玉鳳院の北西の敷地一五丈を付囑され、妙心寺の経営を任されている⁸⁸⁾。雪江が中風になって以降に、妙心寺の経営を任された。景川は細川政元が邸宅を寺

院にした大心院に住むなどし、没後、妙心寺に埋葬された。大心院はのちに妙心寺そばに移転され役寺となっていた⁸⁹⁾。

二番弟子の悟溪(二四一六～一五〇〇)は、すでに応仁二年(一四六八)に美濃守護代の斎藤妙椿(一四一一～一四八〇)の帰依を受けて、岐阜に瑞龍寺を創建し、文明二年(一四七〇)には瑞龍寺に七堂伽藍を完成させ、瑞龍寺を準十刹となしている。また雪江より玉鳳院の東の敷地を付囑されている。

三番弟子の特芳(一四一九～一五〇六)は、文明一〇年(一四七八)九月十一日には、大徳寺に勅許入院している⁹⁰⁾。そして長享二年(一四八八)に細川政元によって再建された龍安寺の中興となる。その後、龍安寺に西源院を創建して退居している。

最後、四番弟子の東陽(二四二八～一五〇四)は、美濃の少林寺、大仙寺、定慧寺を中心に活動し、少林寺で亡くなっている。また彼ら以外にも般若坊鉄船宗熙(一四〇九～一四九二)のような同門もいた。

すなわち雪江が中風となって以後、景川と悟溪が妙心寺の経営を託されたが、悟溪は関山派の中心地である美濃にあつて、瑞龍寺を中心に活動しており、景川が妙心寺の経営を取りまとめた。特芳は関山派の京都のもう一つの重要寺院である龍安寺を託され、丹波の龍興寺、龍潭寺とともに、いわゆる「三龍寺」を中心に活動した。東陽は主に美濃にあつて雪江の執筆活動を継承し、『妙心寺六祖伝』を完成させている。

このように一五世紀末において、雪江の弟子はそれぞれの地域に拠点となる寺院を持って、それを中心に妙心寺を支えるという形を取っていた。

五 文明一九年(一四八七) 妙心寺への再繪旨

後土御門は雪江が亡くなった翌年の文明一九年(長享元年・一四八七)に、今度は特芳に「再興」の繪

旨を下賜する。

妙心寺者、花園院革離宮作梵宇、請関山和尚、為開山始祖。誠是宗門無双之名刹也。爰罹度々禍乱荒廢云々。所詮、当時雖不領、有所産之由緒、近日雖無音、為末寺之旧縁。相勸筑紫州、宜致寺家再興者。綸命如此、仍執達如是。

文明十九年七月十七日 左中弁政資

特芳禪師丈(室)

⁽⁴⁾

内容は文明九年(一四七七)の綸旨を踏襲しつつ、新たに妙心寺の開祖が関山であることが加わる。これは雪江の執筆活動の影響であろう。そして「所詮」以降に、「当時、領せずと雖も、所産の由緒有り、近日、音無しと雖も、末寺の旧縁を為す」とあるように、当時は所領ではなかったが、歴史的には関係があり、最近は音信がないが、元をたどれば本末関係が認められるとして、「筑紫の州に相勸めて、宜しく寺家の再興を致す者なり」と、九州に妙心寺の再興を催促している。

「筑紫州」は太宰府横岳の崇福寺を中心とした大応派を指すと推測しているが、明確には何を指すかはわからない。そもそも関山派は無因宗因(二三三六―一四〇一)や拙堂宗朴の頃に、大内氏の帰依を受けて河内の観音寺や周防の法泉寺を興隆させたが、大内義弘(一三五六―一四〇〇)が足利氏に反旗を翻し、それを受けて妙心寺も足利義満の怒りを買ひ、寺領などが青蓮院に移譲され断絶に至っている。

よってそれ以後、犬山の瑞泉寺や西宮の海清寺などが、関山派の拠点として存続はしたものの、それらは関山派の独立寺院ではなく、あくまで上位派閥である大灯派の寺院と認識されていた。たとえば悟溪が

開いた瑞龍寺が、文明二年(一四七〇)に準十刹となったときの繪旨に、

金宝山瑞龍禪寺者、紫野大徳寺之門徒也。先院御時、草創之刻被下勅額上者。早以準十刹之例数。可奉祝万歳之宝祚者。天氣如此、仍執達如件。

文明二年庚寅三月十四日 権右中弁兼顯

宗頓上人禪室¹²⁾

「金宝山瑞龍禪寺は紫野大徳寺の門徒なり」と記されている。ここからいまだ関山派が一派として独立していないことが裏付けられる。つまり瑞龍寺や龍安寺や大心院は、この時点では大灯派(大徳寺)の一端寺であった。

後土御門が一度目に復興を要請した文明九年(一四七七)時点では、妙心寺は寺領がほとんどなく、方丈も造営されていない大灯派の一寺院であった。かろうじて雪江の努力によって方丈が建ったが、それ以後、伽藍の整備はなされなかった。それゆえに文明一九年(一四八七)に再度、弟子の特芳に繪旨が下された。ただこの復興計画は、あまり効果がなかったらしく、大応派が資金を調達して建物を建造したという資料は残っていない。

このように妙心寺は、文明年間(一四六九～一四八七)に雪江により復興がなされたものの、いまだ有力な檀越や寺領莊園もしくはその他の経営資金を見いだせず、充分な組織と伽藍の整備を果たせていなかった。だがその状況を打破する、新たな計画が画策される。

六 永正六年(一五〇九) 妙心寺への再々繪旨

永正六年(一五〇九)二月、後柏原は二五日付けで妙心寺に対して、

正法山妙心禪寺者、大灯国師上足之草創、花園仙院御願之蘭若也。是以、繪命復旧、

再興得時。然則、須著紫衣、刷入院儀式。位次等大徳寺、前後可守年月也。門徒相互

専仏法紹隆、宜奉祈宝祚延長之由。天氣如此、仍執達如件。

永正六年二月二十五日左少弁伊長

当寺長老禪室⁽⁴³⁾

と繪旨を下す。応仁文明の乱以後、妙心寺にとって三度目の「再興」の繪旨である。この繪旨を前二度の繪旨と比べてみると、後半「然則」以降が前二度の繪旨と大きく異なる。中身は、1、紫衣を着けて入院の儀式を行うこと、2、位次が大徳寺と同等であるという二点が述べられる。そして最後に、それまでの繪旨にはなかった「仏法の興隆を専らにし、天皇の長寿を祈るよう」という勅願の常套句が入っている。

この繪旨によって、1、妙心寺は勅願寺となり、紫衣入院を勅許され、2、寺格が大徳寺と同等となり、関山派の紫衣地となった。これによりそれまで勅許を受けた新命住持が大徳寺に納めていた官錢を、妙心寺の収入として見込めることになった。

すなわち関山派は妙心寺の発展に、大徳寺の復興資金調達方法と同じ方法をもちいた。だがこの方法は、徹翁派との間に相論を生じさせた。この相論の顛末については別稿にゆずるとして、その後、妙心寺

は美濃守護代斎藤氏の夫人利貞尼より領地の寄進を受け、大永年間(一五二二～一五二八)には四派本庵が建ちそろう。そして次々に伽藍の建立が進み、江戸時代に入ると紫衣入院施設として七堂伽藍を整備させていく。

ただ妙心寺は紫衣地化後すぐに関山派の本寺となったのではなく、江戸末期まで瑞泉寺、瑞龍寺、龍安寺などが有力寺院として独自の権力を有していた。さらに現在に到っては、妙心寺は儀礼組織の頂点にあるものの、行政組織としては妙心寺派の一寺院となっている。このように結局、妙心寺が最高権力機構となりえなかったことが、山林派の組織的・思想的特徴を象徴しているのではなからうか。

まとめ

大徳寺と妙心寺の復興整備過程をまとめよう。大徳寺は、文明五年(一四七三)六月十九日、後土御門により再興の綸旨が下賜され、紫衣の官銭を調達し始める。文明七年(一四七五)には紫野に再建がはじまり、入院の方式が吹嘘状による補任へとかわる。そして文明十一年(一四七九)には法堂が上棟され、文明十三年(一四八一)には正門と偏門が落慶し、順調に復興が順調に進む。

妙心寺は文明九年(一四七七)に再興の綸旨が下賜され方丈が造られるが、それ以後の整備は進まない。一〇年後の文明十九年(一四八七)に、再び後土御門が再興の綸旨を下賜したが、この際も援助は得られなかった。しかし永正六年(一五〇九)に、後柏原が妙心寺に紫衣敕住の綸旨を下賜すると、大徳寺復興方法と同じく官銭を得ることができるようになり、ここから紫衣地として妙心寺の伽藍整備がはじまる。

さてでは「はじめに」で提起した、「大徳寺の復興」と「分裂以前の関山派と徹翁派の關係」について

の回答である。

応仁文明の乱後、関山派と徹翁派は大灯派一門として、ともに大徳寺の復興に尽力し、評定衆として大徳寺を運営していた。その復興方法は、大灯派の僧を大徳寺に紫衣敕住させ、官銭を提供させることで資金を調達した。そして大灯派の中でも春浦、雪江、一休の弟子たちが出世し、やがて戦国期にそれぞれ一派を築いていく。また商品経済の中心となりつつある商業都市堺に信者を得たことが資金調達に結びついた。

しかし永正六年(一五〇九)に妙心寺が紫衣地となり、大灯派は関山派と徹翁派に分裂する。これ以降、一時的に、徹翁派から関山派への批判的言説が見られるようになる。先行研究の中には、これを根拠として、関山派と徹翁派は中世以来いがみ合っていたとする説や、関山は宗峰に擯斥されたと主張する説もある⁽⁴⁾。しかし本稿の調査結果からすると、両派は分裂以前は、大灯派として紐帯を結び協同関係にあった。徹翁派による関山派への批判は、両派の分裂以後の一時的な現象である。

さて、関山派は妙心寺に紫衣勅許が下賜される以前から、美濃の瑞龍寺が準十刹になり、龍興寺や龍安寺が再建されるなど、地方で繁栄していく。その繁栄をもとに本寺の大徳寺に資金を供給するが、やがて妙心寺を勅願寺となし出世寺院とするようになる。そして戦国期以降は寺域を拡大し、派閥を発展させ、臨済宗の最大派閥となっていく。今後ともこのような大灯派や関山派の歴史を通して、山林派・林下の特徴を説明していきたい。

(1)小川信『山名宗全と細川勝元』(吉川弘文館、二〇一三年)。

(2)『一休年譜』応仁元年丁亥の条。平野宗浄、一休和尚全集卷三『自戒集・一休年譜』(春秋社、二〇〇三年) 六三頁、九八頁。以下「平野一休年譜」と略す。

- (3) 中井裕子『室町時代の相国寺住持と塔頭』(相国寺教化活動委員会、二〇一三年)。
- (4) 文明五年六月十九日後土御門天皇繪旨。田山方南著『秘室Ⅱ新装版大徳寺』(講談社、一九七六年) 三〇〇頁、図版三四四。
- (5) 『一休年譜』文明五年癸巳の条。平野一休年譜、六七頁、一〇〇頁。
- (6) 『官銭』は「成功」と同じ資金調達法といえよう。成功とは官人が官位を獲得する代わりに、勅願寺などの寺社の造営事業を請け負ったり資金提供を行う制度である。成功制については、上島亨『日本中世社会の形成と王権』(名古屋大学出版会、二〇一〇年) 第三章第二節、第三節などを参照。
- (7) 竹貫元勝『紫野大徳寺の歴史と文化』(淡交社、二〇〇九年) 一九九〜二〇五頁。
- (8) 『大弘禪師語録』巻一、正統大宗禪師行状。『大徳寺禪語録集成』巻二(法蔵館、一九八九年) 三三五〜三三七頁。以下の春浦の伝記はこの行状による。
- (9) 『大宗禪師語録』巻上、善室慶大師(Ⅱ大姉) 三十三年忌。『大徳寺禪語録集成』巻二(法蔵館、一九八九年) 一六頁。竹貫元勝『紫野大徳寺の歴史と文化』(淡交社、二〇〇九年) 七五頁。平野宗浄校訂『増補大徳寺世譜』(思文閣出版、一九七九年) 一〇五〜一〇七頁。以下「平野大徳世譜」と略す。
- (10) 『実隆日記』延徳二年二月一日の第二条。『大日本史料』八之四〇、四頁。
- (11) 平野宗浄編『雪江禪師語録』(思文閣出版、一九七九年) 一九頁〜二四頁。
- (12) 平野大徳世譜、六一頁。
- (13) 『宗恵大照禪師語録』乾卷所収「岐庵揚和尚語録」。『大徳寺禪語録集成』巻二(法蔵館、一九八九年) 二五四頁。
- (14) 『長興宿禰卿記』文明七年三月二〇日の条。『史料纂集』巻一一五、一一〜一二頁。
- (15) 『親長卿記』文明七年三月二〇日の条。『史料纂集』巻一三二、一一八頁。

- (16) 『景川語録』 卷上、住京兆龍宝山大徳禪寺語。大正蔵八一、二九〇頁中。
- (17) 文明七年七月二十日後土御門天皇綸旨。『大日本古文書』大徳寺一、一一頁。
- (18) 『兼顕卿曆記』 文明九年八月五日の条。画像データを国立歴史民俗博物館、館蔵資料データベース、館蔵資料(画像付々) https://www.rekihaku.ac.jp/up.cgi/login.pl?param=svuz/db_param で検索して見ることが可能。以下『兼顕卿記』のURLはすべて同じ。
- (19) 長享三年六月九日後土御門天皇綸旨案。山田宗敏著、伊藤克己補『史料大徳寺の歴史』(毎日新聞社、一九九三年) 一九〇頁所収「宣秀御教書案」に基づく。
- (20) 資料は『秋季特別展沢庵・江月とその時代』(堺市博物館、一九八三年) 三一頁、図版二一。釈文は『万松祖録』寛永五年、五七歳の条。『沢庵和尚全集』卷六(沢庵和尚刊行会・工藝社、一九二八年) 六五頁。
- (21) 平野大徳世譜、一〇九〜一一二頁。
- (22) 『親長卿記』 文明六年二月一五日および一六日の条。『史料纂集』卷一三二、一四頁。
- (23) 『一休年譜』 文明六年甲午の条。平野一休年譜、六七頁、一〇〇頁。
- (24) 特芳の大徳寺入院については、『大徳寺世譜』に「再興の始め」と記されている。平野大徳世譜、一一二頁。また『親長卿記』 文明一〇年九月一日の条「今日大徳寺入院也」に細字で「近日紫野造営。新命下特芳云々」とあり、これは方丈の造営を指す。『史料纂集』卷一四六、三七頁。
- (25) 文明十年十一月二十二日室町奉行連署奉書。『大日本古文書』大徳寺一、一六二頁。
- (26) 『一休年譜』 文明一三年辛丑の条。平野一休年譜、七四、一〇二頁。
- (27) 『龍宝山大徳寺誌』 卷一、編年、文明十八年の条。写本未刊行。
- (28) 明応二年七月七日大徳寺文書入日記。『大日本古文書』大徳寺一、五三四頁。

- (29) 文明十三年十二月十九日宗純(一休) 入牌料納下帳。『大日本古文書』真珠庵一、一〇一〜一〇六頁。
- (30) 永正三年七月二八日壁書、永正三年二月侍真寮壁書。『大日本古文書』大徳寺七、二二一〜二二三頁。
- (31) 『兼顕卿曆記』文明九年八月五日の条。注18に同じ。
- (32) 「大徳寺再興奉加錢納下帳」『大日本古文書』真珠庵一、一五七〜一五九頁。
- (33) 文明十一年閏九月三日尾和宗臨寄進状。『大日本古文書』大徳寺一〇、一〇〇頁。また上田純一「大徳寺派の堺進出をめぐる」(『仏教史学研究』三七―二、一九九四年)。矢内一磨「文明年間の大徳寺と堺町衆に関する新史料について」(『日本史研究』三九六、一九九五)。
- (34) 妙心寺は美濃国の上之保(岐阜県関市上之保)を寺領として知行されていたが、太守土岐成頼や代官が横領し、実効支配をすることができていなかった。寛正五年(一四六四)に、細川勝元の尽力により將軍義政の御内書を下付され、斎藤妙椿などはたらくによって、知行を得たとされる。
- (35) 文明九年閏正月二十六日後土御門天皇諭旨。『開山無相大師六五〇年遠諱記念「京都妙心寺」』(読売新聞社、二〇〇九年) 一二三頁、図録五一。以下「妙心寺図録」と略す。
- (36) 無著著『花園遺臭録』方丈梁誌。
- (37) 雪江和尚遺誡。川上孤山著、荻須純道補『増補妙心寺史』(思文閣出版、一九七五年) 九九頁。この遺誡は筆跡からすると、文明一二年(一四七九)以降の執筆である。「文明七年」は異筆であり、別人が添加したものであろう。
- (38) 敷地付属状。「妙心寺図録」一二四頁、図録五二。
- (39) 細川政元の邸宅を寺となした大心院は、歴博甲本『洛中洛外図屏風』の左隻(西隻)に、細川邸、典麿邸、柳の御所の一角に描かれており確認できる。そして現在も「京都市上京区大心院町」と町名(地名)に名残をとどめている。

- (40) 『親長卿記』 文明一〇年九月十一日の条。『大日本史料』 八之一〇。特芳の大徳寺入院は、八月六日に雪江が広橋兼顕に執奏しての入院であった。『兼顕卿記』 及び『兼顕卿記別記』 文明一〇年八月六日の条。注18に同じ。
- (41) 文明十九年七月十七日後土御門天皇綸旨。妙心寺図録、一四二頁、図録六八。
- (42) 『虎穴録』 序。大正蔵八一、三二二頁下。
- (43) 永正六年二月二十五日後柏原天皇綸旨。川上孤山著、荻須純道補『増補妙心寺史』(思文閣出版、一九七五年) 一七九頁。
- (44) 関山派と徹翁派の確執については、笹尾哲雄「大灯国師の関山義絶について」(『日本仏教』三五、一九七三年) や、加藤正俊「大灯派下の正系をめぐって―徹翁派と関山派の確執―」(『禪文化研究所紀要』六、一九七四年) など。

